

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03400

研究課題名（和文）知的障害をもつ成人への心理療法の研究 実態把握と方法の検討

研究課題名（英文）Study on Psychotherapy for Adults with Intellectual Disabilities

研究代表者

中島 由宇（Nakashima, Yu）

東海大学・文化社会学部・講師

研究者番号：90824920

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：知的障害をもつ成人のメンタルヘルス上の問題は見逃されやすく、我が国における実践・研究は立ち遅れている。そこで本研究では、心理療法の取り組みの実態を把握し、心理療法実施における社会的障壁を推定すると共に、効果的な心理療法の方法について検討した。質問紙調査、文献レビュー、翻訳、インタビュー調査を多角的に実施した。

結果として、心理療法実践の乏しい実態や実践を妨げる社会的障壁を明らかにした。また、心理療法実践が非特異的で多様であることを示し、知的障害の特異的、固定的な捉え方からの脱却の重要性を示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我が国においてこれまで実践や研究の蓄積が乏しかった当該領域において、本邦初の実態調査、世界的な研究動向の網羅的、体系的な概観、研究史上重要な文献の翻訳、当該領域における本邦のパイオニアである心理職へのインタビュー調査などによって、今後の学術的基礎となりうる研究成果を提示した。本研究の研究成果は心理療法実践の社会的障壁の除去と心理療法の方法論の発展に寄与することが期待され、知的障害をもつ成人のニーズに即した心理的支援が展開する一助となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The mental health problems of adults with intellectual disabilities are easily overlooked; moreover, the practice and research lag behind in Japan. Therefore, this study sought to determine the reality of psychotherapy efforts in this regard, estimate social barriers to the implementation of psychotherapy, and examine effective methods of psychotherapy. A questionnaire survey, literature review, translation, and interviews were conducted from multiple perspectives. Results identified that psychotherapy practice is scarce and that there are social barriers that hinder practice. Psychotherapy practice is nonspecific and diverse, which suggests the importance of moving away from a specific and fixed view of intellectual disability.

研究分野：臨床心理学

キーワード：知的障害 心理療法 成人 社会的障壁

1. 研究開始当初の背景

2014年に我が国が批准した障害者権利条約では「障害者に対して他の者に提供されるものと同一の範囲、質及び水準の無償の又は負担しやすい費用の保健及び保健計画を提供すること」がうたわれており、障害をもつ人に対して、少なくとも一般と同等のレベルの心理療法を提供することは我が国における喫緊の課題であると捉えられた。

知的障害をもつ成人は一般よりもメンタルヘルスの問題のリスクを増加させるようなライフイベントを経験することが多く(Taylor & Knapp, 2013)、近年の研究では彼らがメンタルヘルス上の問題を呈することは珍しいことではないことが明らかになってきた(その頻度は、22.4%(Cooper et al., 2007), 20.1%(Taylor et al., 2004), 23.8%(Shimoyama et al., 2018)等)。

しかし、彼らのメンタルヘルスの問題は見逃されやすく、我が国における実践・研究は立ち遅れている。現状の取り組みは薬物療法や行動制限等に集中しており、心理療法は積極的に取り組まれておらず(Shimoyama et al., 2018)、研究はきわめて不十分であると考えられた。研究代表者は、知的障害をもつ成人専門の全国でも稀有な精神科病院において長年心理療法に取り組み、事例研究を中心とした研究成果(ex. 佐藤, 2003, 2008; 中島, 2015, 2017)を重ね、博士論文(中島, 2017)と、知的障害をもつ成人への心理療法の学術書としては我が国初の単著をまとめ(中島, 2018)、心理療法の可能性とその方法の基本的視座を示した。それを踏まえて本研究では、知的障害をもつ成人への心理療法についてより広範な検討を多角的に行うこととした。まず、我が国の取り組みの実態を把握して、何が心理療法実施の社会的障壁となっているのかを検討し、さらに、取り組みが比較的豊富なイギリスでの研究知見を整理し、我が国の臨床現場での実践知を明らかにして、心理療法はいかなる方法が適切であるのかを包括的に検討する。研究方法が多岐にわたるため、それぞれ研究経験の豊富な研究分担者を得た。これらの諸研究により、知的障害をもつ成人への心理療法の学術的・実践的基盤を築くことを目指すこととした。

2. 研究の目的

本研究は、知的障害をもつ成人への心理療法の(A)実態の把握と(B)方法の検討からなる(右図1)。

(A)知的障害をもつ成人への心理療法の実態把握

我が国では知的障害をもつ成人への心理療法の提供や利用の実態はこれまで明らかにされていない。イギリスにおいては、Royal College of Psychiatrists(2006)がセラピストを対象として心理療法提供の実態や提供の障壁等について質問紙調査を行った。

また、彼らが心理療法等へアクセスする困難の背景として、Taylor&Knapp(2013)は、彼らの情緒的な問題に対する周囲の知識や気づきの不足やセラピスト側の抵抗等を挙げた。我が国でも、心理療法の実施には意識的な障壁を含む多くの社会的障壁が存在すると考えられる。セラピストの意識面だけでなく、知的障害の特性上、彼らの心理療法利用の意思と必要性を捉えて心理療法へのアクセスを支援する立場にある福祉施設職員の意識面にも着目する必要がある。そこで、本邦の取り組みの実態と福祉施設職員、心理職の意識を明らかにして彼らの心理療法利用の障壁を推定することを目指す。

(B)知的障害をもつ成人への心理療法の方法の検討

知的障害をもつ成人への心理療法の方法について世界的にはイギリスで例外的に研究蓄積があるが、我が国ではその研究動向はほとんど知られていない。そこで、文献研究と翻訳により先行研究の知見を整理し本邦の学界で共有することを目指す。また、本邦では彼らへの心理療法の研究は乏しいものの実践は皆無ではないことに注目し、優れた実践者から実践知を聴きとり方法を検討することを目指す。このように本研究では、世界的な研究動向を整理することと、実践現場における声を聴きとることによって、知的障害をもつ成人への心理療法の方法の多角的な検討を目指すものである。

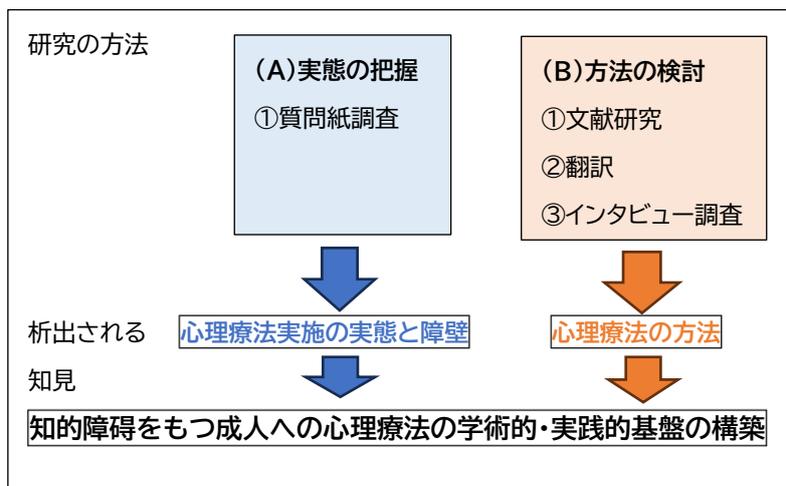


図1 本研究の構造

3. 研究の方法

(A) 実態の把握①質問紙調査 ①-1 福祉施設職員の意識調査 (中島・改田, 2023): 神奈川県内の知的障害をもつ成人を支援する福祉施設職員に質問紙を郵送し、236名(回収率32.3%)より回答を得た。心理的課題と支援に対する認識、心理的課題と支援に関する具体的経験、知的障害をもつ成人の心理や支援に対する認識、心理療法に対する理解や支援について尋ねた。

(A) 実態の把握①質問紙調査 ①-2 心理職の意識調査 (中島・改田, 2024): 東京都、神奈川県、千葉県精神科・心療内科に質問紙を郵送し、153名(回収率8.2%)の心理職より回答を得た。心理的課題と支援に対する認識、心理療法の具体的な実践経験、知的障害をもつ成人への心理療法の学習経験、知的障害をもつ成人の心理や支援に対する認識、心理療法に対する認識について尋ねた。

(B) 方法の検討①文献研究 (中島・櫻井, 2023): 心理療法で標的とされる課題や心理療法の技法、それらの関連などを明らかにすることを目的に、システマティックレビューの方法を参考に英語文献を検討した。論文検索等によって特定した1,182編の論文から53編を採用し分析した。

(B) 方法の検討②翻訳: 当該領域の基礎を築き特にイギリスでの発展の土台となった文研 Sinason, V. (2010). *Mental Handicap and the Human Condition: An Analytic Approach to Intellectual Disability (Revised edition)*. Free Association Books. を翻訳し、『知的障害のある人への精神分析的アプローチ——人間であるということ』(倉光修・山田美穂(監訳)、中島由宇・櫻井未央・倉光星燈(訳)、ミネルヴァ書房)を出版した。原著に関する論考をまとめ(山田・櫻井・中島, 2021)、日本心理臨床学会大会で自主シンポジウムを3度開催した。

(B) 方法の検討③インタビュー調査 (中島・改田, 印刷中): 心理療法の実践知を、暗黙知的な側面も含めて見出すことを目的に、本邦での第一人者であるセラピストである研究協力者と、後継世代のセラピストである研究者とで非構成的なアクティヴ・インタビューを実施した。

4. 研究成果

(A) 実態の把握①質問紙調査

福祉施設職員、心理職への調査から見いだされた、心理的課題や支援、心理療法の実態と、心理療法へのアクセスにおける社会的障壁の推定、心理療法への認識は下表1の通りである。

表1 知的障害をもつ成人への心理療法へのアクセシビリティに関する意識調査結果

	①-1 福祉施設職員	①-2 心理職	
心理的課題や支援、心理療法の実態	知的障害をもつ成人の多岐にわたる心理的課題	行動的課題を示す人、中高年者、重度障害をもつ人への実践が少ない	現場の課題に心理療法が対応しきれていない
	心理療法の利用は極めて少ない	心理療法の実施は極めて少ない	心理療法実践が乏しい
心理療法へのアクセスにおける社会的障壁の推定	心理療法への認知が不十分		知的障害をもつ人への心理療法の認知の不足(特に重度障害に関して)
	対話能力が必要であるという強いイメージ	重度障害をもつ人には適用困難であるとの認識	
	心理的課題をより環境要因に帰属させる傾向・社会モデル的	心理療法技法の適用可能性に対する素朴な直感的イメージ	心理的課題への認識の相違
	知的障害をもつ成人の意思や感情の理解の困難感が比較的強い	知的障害をもつ成人の意思や感情の理解の困難感が比較的弱い	困難感の切迫度合いの相違
心理療法への認識	経済的・制度的な障壁があるという想定が強い(実態との齟齬)		経済的・制度的障壁の存在の想定
	連携への強いニーズ、心理療法へのポジティブな印象	限定的だが、実践の効果やニーズの把握、関心の高まり	ニーズに照らし、障壁の乗り越え、心理療法実践の充実の必要

(B) 方法の検討①文献研究

知的障害をもつ成人への心理療法の実践研究をレビューして明らかになった結果は下図 2 の通りである。

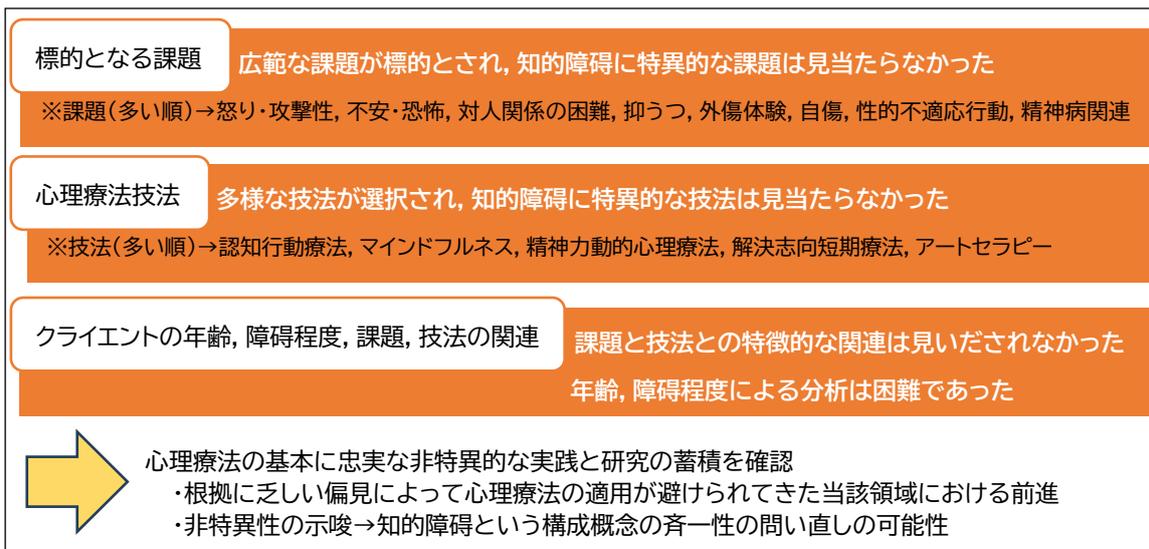


図2 知的障害をもつ成人への心理療法に関する文献研究結果

(B) 方法の検討②翻訳

翻訳に関連して開催した日本心理臨床学会大会自主シンポジウムの概要は下図 3 の通りである。知的障害をもつ成人の心理療法に関心や悩みをもつ心理職 100 名前後が毎回参加した。

テーマ:知的障害(・発達障害)をもつ(のある)人への心理療法		
第1回(2021) わたしたちが“心もとなさ”を抱え続けるために 話題提供:中島由宇・櫻井未央 指定討論:倉光修・山田美穂 かかわりのなかで感じられる不確かさやわからなさ=“心もとなさ”を抱えていく意味やその困難と意義の検討	第2回(2022) “心もとなさ”を分かち合うために 話題提供:梅垣沙織・山田美穂 指定討論:中島由宇 日々の臨床実践からさまざま感じられる“心もとなさ”の心理職同士の共有と省察	第3回(2023) “心もとなさ”を誰と分かち合えるのか 話題提供:廣木彩・中島由宇 指定討論:櫻井未央 知的障害という枠を越えた検討と, “心もとなさ”の福祉の支援者やクライアントとの共有の模索

図3 知的障害をもつ成人への心理療法に関するシンポジウムの概要

(B) 方法の検討③インタビュー調査

アクティブ・インタビューによって共同構築された心理療法の実践知は下図 4 の通りである。

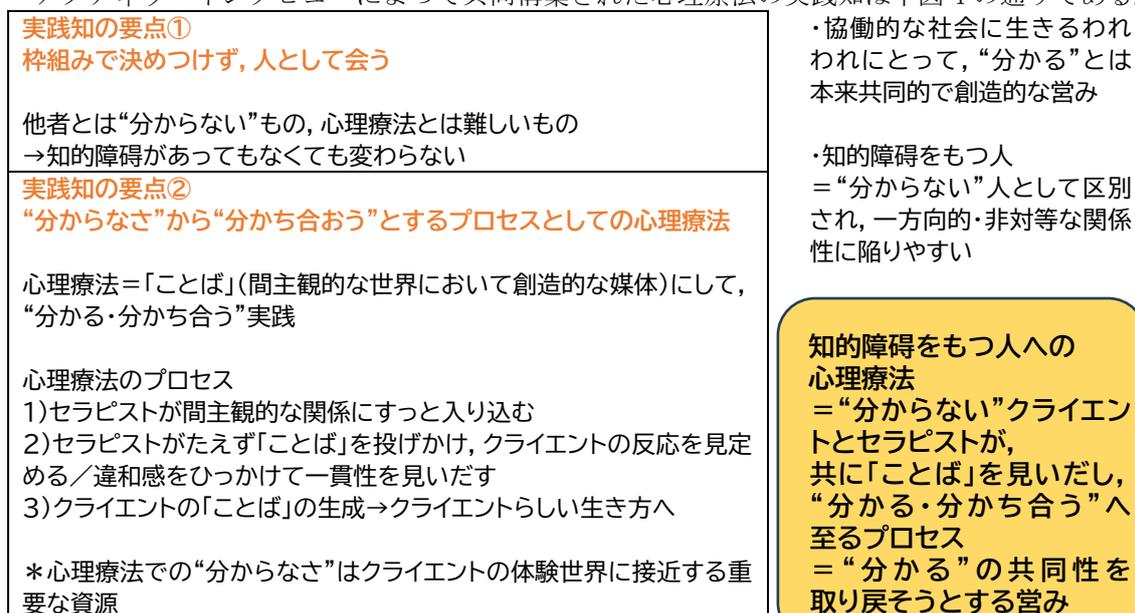


図4 知的障害をもつ人への心理療法の実践知 研究結果

研究成果のまとめ

以上の研究成果を整理し、今後の展望についてまとめたのが下図5である。

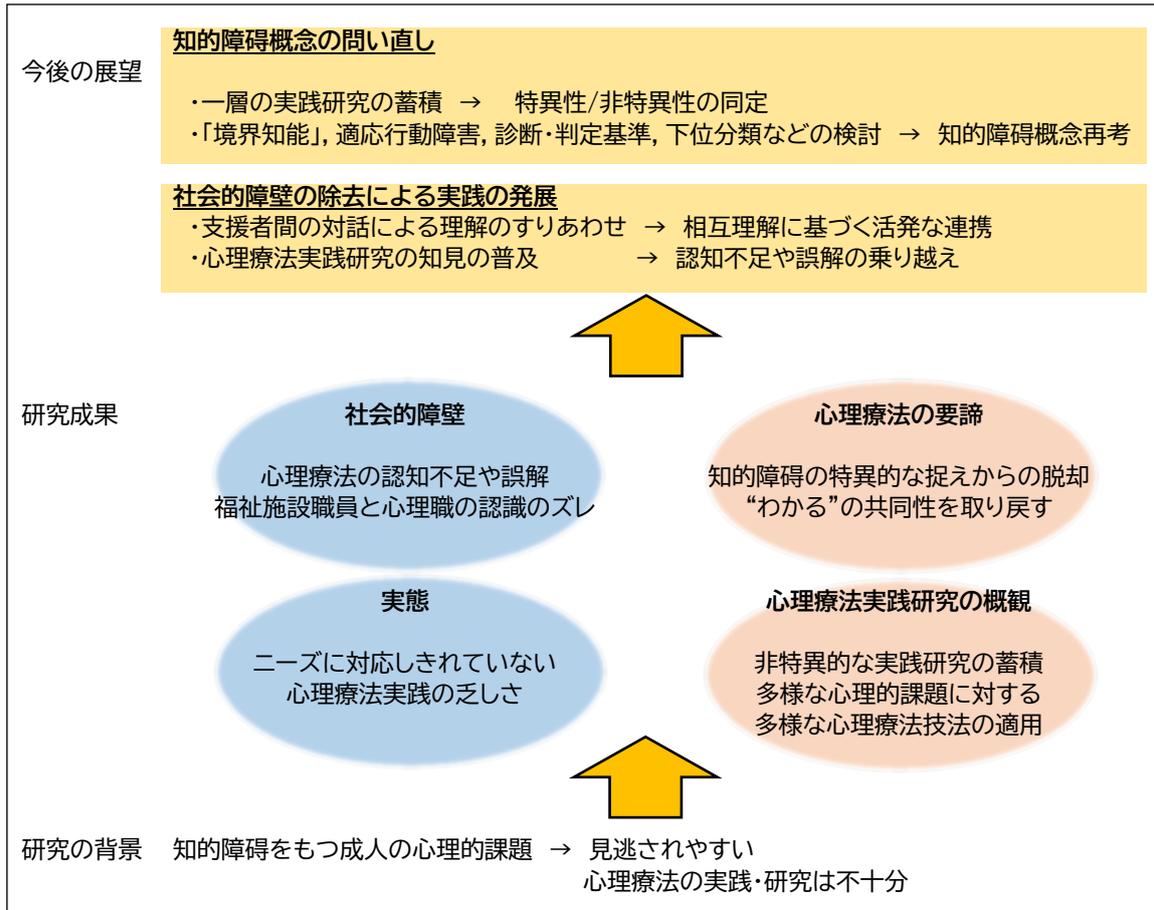


図5 本研究の成果

本研究は、我が国においてこれまで実践や研究の蓄積が乏しかった知的障害をもつ成人への心理療法について、質問紙調査、翻訳、文献レビュー、インタビュー調査など多角的な手法を用いて、その実態と、実践を妨げる社会的障壁、心理療法の方法に関する検討を行った。実態調査は本邦初の成果であり、心理職、福祉施設職員それぞれに調査を行い、その両者の相違を分析することで、実践の発展を妨げる社会的障壁を立体的に検討することができた。当該領域の研究が世界的に発展した契機となった研究史上重要な文献を翻訳し出版することが実現した。文献レビューではシステムティックレビューの技法を参照し、研究時点での英語文献の網羅的、体系的な把握が可能となった。インタビュー調査では当該領域における本邦のパイオニアの研究協力を得て、実践的な有用性の高い知見を得ることができた。こうした一連の研究により、当該領域の基礎となる、上図のような研究成果を産出するに至った。

今後の展望として、まず、実践的な課題として、本研究の成果を活用して社会的障壁の除去に取り組み、心理療法実践の発展に寄与することが望まれる。心理職と福祉施設職員といった支援者間での活発な対話によりそれぞれの相互理解を深め、心理療法を導入しやすくなるような連携のシステムを構築することが求められる。また、心理療法に対する認知の不足や誤解を解消するための知見の普及も必要であると考えられる。次に、研究課題として、本研究で示唆された知的障害をもつ成人への心理療法の非特異性について検討を深めることが求められる。本研究において、知的障害を個人に帰属する特異的な特性として過度に固定的に捉えないことの実践的な重要性が重ねて示された。今後、実践研究を一層蓄積することによって、その特異性/非特異性を同定することを目指すことが求められる。それと共に、知的障害という概念の自明性を再検討するような研究テーマ（例えば、知的障害概念の境界（「境界知能」）の検討、知的障害概念を構成する諸要素（適応行動障害、知能）の検討、知的障害の診断・判定に関する検討等）に取り組み、知的障害とは何であるのかを問い直すような研究の視角が求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 中島由宇・改田明子	4. 巻 -
2. 論文標題 知的障害のある人への心理療法の実践知 暗黙知のジェネラティビティへ向かって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 質的心理学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島由宇・櫻井未央	4. 巻 41(3)
2. 論文標題 知的障害のある成人への心理療法の英語文献を中心とした検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 263-269
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島由宇・改田明子	4. 巻 10
2. 論文標題 知的障害のある成人の心理療法へのアクセシビリティに 関する検討 福祉施設職員の意識調査から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東海大学紀要文化社会学部	6. 最初と最後の頁 37-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18995/24344710.10.37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中島由宇・改田明子	4. 巻 11
2. 論文標題 知的障害のある成人の心理療法への アクセシビリティに関する検討 精神科・心療内科に勤務する心理職の意識調査から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東海大学紀要文化社会学部	6. 最初と最後の頁 81-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18995/24344710.11.81	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中島由宇	4. 巻 9
2. 論文標題 心理職の目	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東海大学心理教育相談室紀要	6. 最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島由宇	4. 巻 8
2. 論文標題 まばゆい記憶のかけら	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東海大学心理教育相談室紀要	6. 最初と最後の頁 27 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島 由宇	4. 巻 7
2. 論文標題 認識世界への共感的理解 知能検査という道具を道具として用いるために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東海大学心理教育相談室紀要	6. 最初と最後の頁 33-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島 由宇	4. 巻 6
2. 論文標題 知的障害福祉における意思決定支援を捉える視座	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海大学紀要文化社会学部	6. 最初と最後の頁 51 ~ 74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18995/24344710.6.51	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 砂川 芽吹・山田 美穂	4. 巻 23
2. 論文標題 自閉スペクトラム症のある女の子の親子グループプログラムの開発：立ち上げまでの経緯	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamada Miho, Kawano Tomoyo	4. 巻 75
2. 論文標題 Emerging wisdom through a traditional bon dance in group dance/movement therapy: A single case study of dementia	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Arts in Psychotherapy	6. 最初と最後の頁 101822 ~ 101822
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.aip.2021.101822	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田美穂・櫻井未央・中島由宇	4. 巻 14
2. 論文標題 V.シナソソ 『知的障害のある人への精神分析的アプローチ』をめぐる対話のはじまり	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 就実教育実践研究	6. 最初と最後の頁 101-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中島由宇	4. 巻 6
2. 論文標題 インペアメントに向き合う痛み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海大学心理教育相談室紀要	6. 最初と最後の頁 41-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島由宇	4. 巻 212
2. 論文標題 福森伸【著】『ありのままがあるところ』（書評）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島由宇・天野洸	4. 巻 162
2. 論文標題 人との関係に問題をもつ子どもたち(第104回)出会いの瞬間はいかにして訪れるのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 86-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島由宇	4. 巻 34
2. 論文標題 心理療法が作り出す安心感（発達障害の生活を支援する）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 そだちの科学	6. 最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井未央	4. 巻 12
2. 論文標題 語りのネガティビティに耐え、眺め続けること	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井未央・五嶋亜子	4. 巻 令和2年度
2. 論文標題 子育てに不安を抱える保護者への心理的支援 コロナ禍状況からみえてくる親と子の関係性の課題ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 杏林大学地域交流推進室論集	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田美穂	4. 巻 12
2. 論文標題 教育・心理専門職養成教育における身体的共感のトレーニング ダンス・ムーブメント・セラピーとフォーカシングの技法を用いて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ダンスセラピー研究	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田美穂	4. 巻 51(1)
2. 論文標題 認知症高齢者のダンスセラピーにおける身体的共感と創造的展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本芸術療法学会誌	6. 最初と最後の頁 88-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 中島由宇・櫻井未央・廣木彩・山田美穂
2. 発表標題 知的障害・発達障害のある人への心理療法 その3 - “心もとなさ”を誰と分かち合えるのか -
3. 学会等名 日本心理臨床学会第42回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 櫻井未央・中島由宇・山田美穂・梅垣沙織
2. 発表標題 知的障害をもつ人への心理療法 その2 “心もとなさ”を分かち合うために
3. 学会等名 日本心理臨床学会第41回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 櫻井未央・山田美穂・中島由宇
2. 発表標題 知的障害をもつ人への心理療法 わたしたちが“心もとなさ”を抱え続けるために
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 篁 倫子・山田 美穂
2. 発表標題 リサーチコンサルテーション：ハイリスク児の発達と支援
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田美穂
2. 発表標題 ダンスセラピーにおける「見る/見られる」体験の意味
3. 学会等名 日本ダンス・セラピー協会第27回全国学術研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Allan Molnar, Shizuka Sutani, Carrie K. L. Ho, Miho Yamada, Taiga Kameishi, Koume Shintani & Taichi Akutsu
2. 発表標題 MUSICKING: Online virtual workshop to combine multiple artistic expressions and soundscape on the theme of Beethoven's "Ode to Joy"
3. 学会等名 International Society for Education through Art International Virtual Conference
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 中島 由宇、沖潮 満里子、広津 侑実子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 330
3. 書名 これからの障害心理学	

1. 著者名 ヴァレリー・シナソン、倉光 修、山田 美穂、中島 由宇、櫻井 未央、倉光 星燈	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 412
3. 書名 知的障害のある人への精神分析的アプローチ	

1. 著者名 田中千穂子、内海新祐	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 240
3. 書名 こころで関わりこころをつかう	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	櫻井 未央 (Sakurai Mio) (10807829)	杏林大学・保健学部・講師 (32610)	
研究分担者	改田 明子 (Kaida Akiko) (80192532)	二松學舎大學・文学部・教授 (32664)	
研究分担者	山田 美穂 (Yamada Miho) (30610026)	お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授 (12611)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関